
猫の女王様

瑞雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の女王様

【Nコード】

N5979P

【作者名】

瑞雨

【あらすじ】

むかし、むかしのお話です。くにはいつもそれをしはいする王がいました。そんな王はいつもと違った男ではなく、わかくうつくしい女が王のときもあつたのです。

・・・これはむかしむかし、から始まる物語。

『猫』を題材にした物語集。猫を擬人化したお話です。

はじまり

むかし、むかしのおはなしです。

くにはいつもそれをしはいする王がいました。

そんな王はいつもとしをとった男ではなく、わかうつくしい女が王のときもあつたのです。

ある西の国には、すれ違うすべての者を魅了する女王様がいました。

そしてある北の国にはその可愛らしいご容姿からは想像もつかないような残虐な言葉を口にするお姫様がいました。

ある南の国には民を愛し国を愛する野性的な美しさをもつ姫様が、またある東の国には自然を愛し、そして慈悲深く、まるで山のように寛大な心をもつ姫君がいました。

様々な時代において相応しい女の王が存在したのです。

王は時として相応しいものではない者が国を支配するものですが、これらの姫は少なくともそれには当てはまりませんでした。みな一様に国を、民を思う心は同じでした。

これはむかし、むかしからはじまるものがたり。

はじまり（後書き）

猫の女王様のはじまり、はじまり。

？ シャム

昔々、ある国にひとりの女王様が仰せでした。

女王様はそれはもうたいそう美しく、サファイアブルーの瞳、闇のように吸い込まれそうなほどの豊かな黒い髪、白い絹のようにきめ細かい柔肌をお持ちでした。いつも愉快そうに微笑む唇はまるで乙女の生き血を吸ったかのように真っ赤で、首から下にかけては豊かに膨らんだ胸に緩やかに曲線を描いた腰、スリットの入ったドレスから惜しげもなく出されたすらりとした脚を組み、ルビーの埋め込まれた黄金に輝く王座にお座りになられているのでした。

そんな女王様のご容姿に男たちは心を奪われ、女たちは羨望の眼差しを送るので御座います。傾国の美女などという言葉が御座いますが、そのような言葉など、とてもじゃございませんがこの女王様に与えるに相応しくないのでございます。傾けるのは国などでは小さすぎるのです。世界を、いえそれ以上のものを傾けてしまうでしょう。それほど女王様には魅力がありなのです。

そんな女王様のお話を僭越ながらこの私がひとつ、させていただきます。どうかご静聴下さいませ。

大理石の広がる広い床に男が一人鎮座している。そしてそれを蔑むように見つめる女が一人。

「して、そなたは妾から如何にして信用を勝ち得るのじゃ」

口元は笑っているが瞳は笑っていない。気怠そうに鉄扇を仰ぐ姿さえどこか色めいて艶麗である。

「は、望みとあらば命まで」

男は片膝を折り手を胸に当てる。低く頭を下げたまま抑揚のない声で答えた。

「…命とな」

女王は興味のない目で男を見つめた。ついた手に顎を乗せゆるりと鉄扇を動かす。

「御意にございます。必要とあらば冥土の道までいつなりと」

女王は冷めた瞳で男を見つめた。そして、長く細い脚を組み替えたその瞬間に立ち込める薫りは頭の芯が痺れるほどくらくらとし、深くひどく濃密で扇情的なものだった。しかし決して不快なものではない不思議な香物の薫りである。普通の男ならばその薫りだけで堕ちてしまうであろう。だが目の前の男に変化はない。

「妾はのう、死ぬと言って死ぬような男はいらぬのじゃ。そのような男は妾には五万という」

女王は鉄扇を持つ手を止めた。

「簡単に命を預ける男など、つまらぬ」

女王は退屈そうに目を細めた。口を開く間も、閉じている間も、男からその冷たい視線は離さない。だが真つ赤な唇だけは常に弧を描いている。瞳と唇の形が合わないのが不自然でいて自然である。

「そなたは、妾を満足させられる答えが、はて出来るのか」

弓なりになる瞳と更にニイっと上がった唇が男を誘う。そしてまた、ぱつと鉄扇を見事に開くと気怠そうに仰いだ。

「先程の答えでは満足を得られませんでしたか。そうですね、ならば、」

男は顔を上げた。その瞳は恐れなど映してはいない。挑戦的に歪み、面白そうに笑みを浮かべている。

「小指を差し上げましょう」

男は右手の小指を高らかに掲げた。女王は鉄扇を仰ぐ手を止めた。

「ほう、小指、とな」

「ええ、小指にございます」

女王は口元を鉄扇で覆い、黒曜石の瞳で男を見た。

「理由を、聞こうかの」

男はニヤリと笑うとすくつと立ち上がり更に高く小指を上げた。

「さる国の娼妓は、意中の旦那に己の小指を贈るそうで御座います。それほどの覚悟があると示すために御座います。そうに御座いますれば私もその儀式に従いましては、あなた様に私の小指を贈る所存

に御座います。私の覚悟の証に利き手の小指に御座います」
高らかに告げた男の口は強気に笑みを浮かべている。

「あなたは命はいらぬと申しました。私も命は惜しゅうございます。かつてあなた様に小指を贈った男性がこの世におられましたでしょうか。いえ、いらつしやらなかったでしょう。あなた様さえよければ、どうか私の小指でご勘弁頂けないで御座いましょうか」

そう言う男はまた片膝をつき正式な礼をした。

「このようなお答えで如何に御座いましょう」

男は頭を下げたまま視線だけを女王にやった。

「妾が切れ、と申せば切るのか」

「御意にございますれば、望みとあらば、これこのようにいつなりと」

男は腰から小刀を抜き、きらりと光る刃先を己の小指に当てた。

「はっはっは!!」

男の答に女王は愉快そうに声をあげ笑った。

「面白い。実に面白いぞ。この妾にそこまでの強気な態度、笑み、そしてその答。そなた、ほんに愉快な男よのう」

女王は腹の底から面白い、と笑みを浮かべた。

「この妾を本気で笑わせるとは」

女王は不敵な笑みではなく、玩具を手にした幼子のような笑みを浮かべた。そして鉄扇をパチンと閉じると、男に向けた。

「気に入った！そなたを妾付きの仕えとする。本日より存分に励むが良い」

「有り難きお言葉、恐悦至極にございまする」

男は深く腰をついた。女王は満足そうに鉄扇を開いた。

「して、そなた名は」

「名はございませぬ」

「ではそなたは今までどのように呼ばれてきた」

「フェル、と。世間の者はみなそのように私を呼びます」

女王は片眉を上げ男を見た。

「みなが呼ぶのなら、それがそなたの名ではないのか」

男は頭を下げたまま答えた。

「いえ、それは世間がつけたもの。私の真の名にございませぬ。真の名はとうの昔に消え失せますれば、今の私には名はございませぬ。好きなようにお呼び下さいませ」

「そうか、ならばそなたは今日から來だ」

「らい、にございますか」

女王は鉄扇を開いた。

「そうじゃ。來だ。妾が幼き頃に飼っていたお気に入り猫の名じや。そなたにやろう」

氣に入らぬか？

女王は鉄扇で顔を隠し、瞳だけを現した。その瞳は楽しそうに笑っている。

「いえ、とんでもございません。有り難き幸せ、大変な名誉にございます」

女王は満足げに笑みを浮かべた。

こうして來様は女王様の直近となったのでございます。この日から女王様の側には必ず來様の存在が見受けられ、女王様はどこに行くにも來様を連れてあそばしました。しかし、來様が何者で、どこから來なすったのかは誰も、女王様ですら存じ上げなかったのです。女王様にすれば來様の過去など、肩についた小さな埃と同じく、氣にするほどのことではなかったのでございます。そして來様も、ご自分の過去については一切を口には致しませんでした。來様は一体何者なのでございましょう。それを知るのはまだ先の、遠い未来のお話でございます。

？ シヤム（後書き）

シヤム猫は別名サイアミーズ。全体的にとっても細くスレンダーなだけ筋肉質で、顔もほっそりしたV字型。大きく広がった耳、アーモンド型でやや釣り上がり、綺麗なサファイアブルーをした瞳をもつ。動きはとても優雅で、とても愛情深く感受性豊か。一人の人に執着する気質もある。

？ ヒメラヤン

昔々のお話です。ある国にひとりの王女様がいらつしやいました。砂糖菓子のように甘く、ふわふわと揺れる黄金に輝く髪と、くるりとしたまん丸な蒼い瞳、陽に焼けることなど知らない白い肌。小さな桜色の爪のついた手足は少し力を入れるだけで簡単に手折れてしまいそうなほどか弱いものでした。王女はいつもリボンやレースのたつぷりをついたドレスと、ヒールの高い靴をお召しでございました。この日のお召し物は瞳と同じトルコ石色で、胸元と腰元に大きなリボン、腕元はパフ形、黄金の髪に結ばれたリボンはドレスと同じくトルコ石色の生地に金色の刺繍の入ったものでございました。

そのご容姿とくれば、それはもうたいそう可愛らしく、お人形のように愛でたくなるようなものに御座いました。このように見目可愛らしい王女様で御座いますが、一癖も二癖もあるお方だったので御座います。今宵はこの王女様についてお話させて頂きたく存じます。どうかしばしの間お耳をお貸し下さいませ。

王女はふわりとドレスを翻して背の長い椅子に座った。お人形のように小さな顔はつまらなそうに歪んでいる。

「あゝあ、退屈。ほんと退屈だわ」

何か面白いことないのー？

王女は口を尖らせ、足をばたつかせた。

「ねえ、そのあんた、何か面白いことないのー？」

声をかけられた兵はびくりと体を揺らし体を強ばらせた。

「は、い、いえ、私で御座いますか……？」

兵は脂汗を流し槍を持つ手を震わせた。

「そう、あんた。で？何かないわけ？」

王女の声に室にいる兵たちはみな緊張した眼差しを伏せ、汗を流した。

「は、はい、城下では近頃剣舞を見せる、見せ小屋なるものが流行っているそうです」

震える声で答えれば、王女は小さな白い人差し指と中指を口元に当て何かを考える素振りを見せた。

「ふうん？剣舞、ねえ……」

剣舞、と口にした王女は面白いものを見つけたかのように目を細めた。

「そうだわ……！奴隷を真剣で闘わせるってのはどう？」

王女はにつこりと桜色の唇を上げた。

「ああ、でも奴隷同士じゃ面白くないわね。そうねえ、雌獅子と闘わせるのはどうかしら？出産前で気の荒くなっている雌獅子と」

王女は無邪気な笑みを浮かべた見た目と裏腹に可愛らしい唇から残酷な言葉を繰り出した。側に控える大臣は大粒の汗を流しながら頭を下げた。

「せ、僭越ながら述べさせて頂きます…。奴隷を獅子と闘わせたとなると、隣国からの反感を買います。奴隷たちは隣国のものなれば、その待遇を耳にしたとなると怒りを買います」

王女はそれを聞き頬を膨らませた。

「つまんなーい」

王女は頬にかかった髪を払いのけた。大臣はその王女の何気ない仕草にさえびくりと体を揺らした。

「でもまあ、いいわ。奴隷なんて穢らしいものこのあたしが目にする価値もないものね」

王女が興味を無くしたのを察するとみなほつと息をついた。

王女は童女のように害のない見目からはまるで想像もつかないような残酷な性格をもっていました。につこりと笑みを浮かべる時は何かを考えてついた時なので城の者たちは背筋を凍らせる思いをするのでした。につこりと可愛らしく笑い、その小さな口から想像もつかないような残酷で怖ろしい言葉を声にするのです。子供のような言葉使いと、フリルたっぷりのドレスを翻し小首を傾げる可愛らしい仕草は全て王女の計算のうちでありました。王女はたいそう頭のキレる方で、このような行動をとること、この国など相手にする必要もない、いずれ滅びる国であろう、と思わせるのです。そして

それは国ばかりでなく城に住む者たちにも『頭の弱い王女』を演じているのです。

王女はこの国をたいそう愛していたのです。しかしこの国は決して豊かではなく、力も弱い。戦争を起こせばたちまち滅してしまふ。国を守るためには攻め込まれないための何かが必要だったのです。なので王女は頭の弱い者を演じるにより、相手にするだけ無駄だと思わせているのです。

しかし、王女の残悪で我が儘放題の言葉は兵を、民を震わせ、暴動が起きるのも時間の問題でした。

王女は己の言葉に麻痺し、心酔していました。初めこそ国を守るための苦肉の策でしたが、演じているうちに自ら残虐性を求めるようになってしまったのです。

「あゝあ、たいくつー」

王女は髪を一房指に巻きつけて怠そうにクルクルと動かしだした。

「…あ、今年は豊作だったのよねー？　だったら税率六十％にあげちゃおっかー」

王女の言葉に大臣は顔を上げ口を開けたまま比でない汗を流した。

「お、王女様、それでは民からの暴動を否認しません……！！」

王女はぎろりと大臣に目をやった。まさに蛇に睨まれた蛙のように大臣は浅い呼吸を繰り返し、己の死を覚悟した。

「なあに？　あたしに意見するわけ？　このあ・た・しに」

「い、いえ、とんでもございません！！で、ですが、それでは民は明日食べていくことさえ困難になります……っ！！」

「あら、世には『パンがなければお菓子を食えばいい』って言葉があるじゃない」

王女は愉快そうに口を上げた。

「ふふ、あれってほんと、素敵な言葉よねー」

王女が冷たい視線を大臣に向けたままうつとりと笑っていると、それまで静かに王女の隣に控えていた男がゆっくりと口を開いた。

「王女様」

「なあに？」

男が口を開いた瞬間王女の空気はがらりと、柔らかいものへと変わった。

「王女様、税率はすでに四十五%をとっております。それでも民からすれば大変な苦勞にございます。六十%もとらなくても十分贅沢はできています。わざわざ民からの反感を買い必要はございません」

男はにっこりと王女に微笑んだ。

「私は王女様がお嫌われになるのを見たくは御座いません。王女様のそのような姿を拝見した暁には私は心の病で死んでしまおうでしょう」

王女は頬を桜色に染め嬉しそうに微笑んだ。

「まあ・・・！！來がそう言うのなら止めるわ！あたし、來に嫌われたくないもの。來を失うのも嫌だわ」

男は満足そうに微笑むと手を胸に当て頭を下げた。

「有り難き御言葉、恐悦至極に存じ上げます」

王女は男を見つめたままにつこりと笑い、その残酷な心を奥底に秘めたのでした。

王女様は來様をたいそう慕っておりました。王女様には誰も意見することは出来ませんでした。が、來様の御言葉には素直に御耳をお貸しになるのです。こうして王女様の我が儘は徐々に少なくなり、本来の素直な王女様にお戻りになってゆくのですが、やはりたまに残酷な心が表に出ることも御座います。その時は來様が御たしなめになられるのでした。來様のご存在は民にとって、兵にとって、国にとって決してなくてはならぬもので御座いました。みながみな、來様を崇め奉りましたが、しかし、來様がどこからいらっしゃったのか、何者なのか、御幾つでいらっしゃるのか、誰一人として知るものは御座いませんでした。そう、王女様でさえも。

さあ今宵はもう遅くに御座いますれば、この王女様のお話はこの辺でお終いと致しましょう。どうか良い夢を御覧下さいませ。

？ ヒマラヤン（後書き）

ヒマラヤンはシャムとペルシャを掛け合わせた愛猫家にとっては夢のような猫とされている。

まん丸と大きなブルーの目、白くふわふわとした体。人懐っこくて、おっとりのんびりマイペース。

？ エジプシャン・マウ

昔々、とてもとても熱く、砂漠地広がる国にひとりの年頃の姫がいらつしゃいました。姫様のお召し物はシルクで出来た柔らかな布を胸元と腰に巻きつけただけのものにございました。そこから覗かせる肌は褐色で、野性味を感じさせるしなやかでいて筋肉質な体軀は少しも無駄がなく、とても魅力的でございました。どこか寂しさ漂うアーモンド型の瞳は明るいグリーンで、ところにより黄み帯びても見えました。そして、姫の発せられるお声は小鳥のさえずりのように可愛らしいものでございました。御髪におきましては銀色に輝いておりました。

本日はこの姫について語らせて頂きましょう。どうぞ、しばしお付き合いますませ。

細身でいてかつ無駄のない四肢を投げ出し、姫は脇息に体をもたれさせた。

「どうして外に出ては駄目なのじゃ」

姫は不満そうに目の前の男を見つめた。

「あなた様は一国の姫様であられます。王族が簡単に下々の前にお姿をお見せになつてはいけません。王族の威厳に関わります故」

男は顔だけを外に出し、他全ての肌を白い布で覆っている。姫の不満げな声に苦笑した顔を見せる。

「僕は、どうしても外に出る必要があるのじゃ」

姫の言葉に男は目を細めた。

「何故外に出なければいけないのです」

姫はアーモンド型の目を伏せた。

「僕は…、」

姫は下唇を噛みしめ、瞼をぎゅっと閉じた。力強く握った手が震えている。

「……僕は、何も知らぬ王にはなりたくないのじゃ。民の暮らしを、民の心を、知りたいのじゃ……。民の心を知るにはこの城から足を踏み出す必要がある、と……、思う」

姫は哀しげに瞳を揺らし、体を起こした。

「民の心を知らずしてどうして民を、一国を治めることができよう。何も知らぬことほど最大の罪はないと、僕はそう思っております」

男はやさしく微笑むと姫の手にそっと触れた。

「姫様、姫様のお心は存分に民にも伝わっております。だからこそ民はあなた様を支持なさるのです。民はあなた様のお優しい心に生きる活力を頂いているのです」

姫は目の前で跪き己の手を優しく握る男の手を見つめた。己より大きな黄みの肌は温かく、姫の心を癒やす。

「どんなに貧しくとも、どんなに辛くともあなた様の笑顔が、生きる勇気をお与えになるのです。あなた様がどんな者にも見下すことなく、平等に笑顔を見せるからこそ、町は、どんな時も笑顔で溢れているのです」

「僕はみな力になれているのだろうか…。僕は民に支えられて生きている。食べる物も、服も、僕はみなによって生かされている。何一つ自分ではできない。僕は、僕はみな負担になっているのではないか…？」

姫はその美しい声を震わせた。

「姫様、民はあなた様のためならば喜んで命を預けるでしょう」

男の言葉に姫は悲観に顔を歪ませ、男の手にすがりついた。

「い、いらぬ！！僕のために民が命を棄てるならば、僕はこんな身分など……っ！」

男は姫の夜空の星のように輝く髪を優しく撫でた。

「ええ、分かっております。あなた様は民を棄てることは決して致しません。分かっているのです。民はみなあなた様のお優しい御心を理解しておられるのです。だからあなた様を王にと選んだのです」

姫は眉尻を下げ男を見上げた。

「儂は、儂は…、みな望む王になれるであろうか」

「勿論に御座います。あなた様は既に立派な王に御座います」

姫は泣きそうな顔で微笑んだ。

「來、お前はずっと儂のそばにいてくれるか？儂が道を踏み誤った時は叱ってくれるか？」

男は手を胸に当て深く礼をした。

「死する時まで私の命はあなた様の御側にいると誓いましょう」

「來……」

姫は嬉しそうに笑った。

「よしっ！！來、城下に行くぞ！！」

「なりません」

「來の頑固頭」

姫はむうっと頬を膨らませた。男は毅然とした態度を保ち、あくまで外出を許さないと口にする。

「頑固で結構」

「民に嫌われるぞ」

姫はニヤリと笑った。

「ええ、結構です。あなた様さえ私を必要として下さるならば私は全人類を敵に回してもかまいません」

首を傾けて笑う男に姫は顔を真っ赤にし、ぷいと横に背けた。

「わ、儂も嫌いになるぞ!？」

首筋まで真っ赤に染めて早口で述べる姫に男はクスリと笑った。

「それは困りましたね。ならば、」

男は己の頭を覆う布を勢いよく剥がし、ばさりと投げた。

「一民として参りましょうか。我々は今この瞬間からただの民に御座いますれば、此処にいるのは場違いであります。」

男はにつこりと笑い体を覆う厚い布も投げ捨てた。随分と身軽になった男の格好を見て姫は手を打ち、立ち上がった。

「來、大好きじゃ!!」

「有り難きお言葉に御座います」

こうして姫様と來様は民の姿となって街へと繰り出したので御座います。民に触れ、民の暮らしに触れ、民から笑顔を貰った姫様はたいそう満足して城に戻られたのでした。

それからと言うもの街では度々、娘と青年が仲睦ましく寄り添う姿が見られたそうに御座います。その姿を見た民は穏やかに笑い、国の平和を喜ぶのでありました。

これにてこのお話は終わりに御座いますねば、ご静聴のほどほんに
感謝いたしまする。

？ エジプシャン・マウ（後書き）

エジプシャンマウは、筋肉が発達しており、運動能力が高い。目はアーモンド型で、少し上がり目。忠実で好奇心旺盛。

？ ジャパニーズ・ボブ・テイル

昔々よりもつと昔のお話に御座います。世には珍しく四季をもつ国の姫君のお話です。木造で出来た大きなお屋敷に、四季折々の植物を植えたお庭にひとりの少女が佇んでおりました。墨を垂らしたかのように真つ黒で、たつぷりとした足元である柔らかい髪を紅い紐を使い腰元でやんわりと結わえていました。何重にも重ねた色鮮やかなお召し物は袖は長く、裾も引きずるように長いのであります。とても優しく穏やかに花々を見つめる瞳は吸い込まれそうなほど深い黒に御座いました。太陽に輝く姫君の髪は、姫君が顔を傾げる度にさらりと流れるので御座います。暇つぶしのお話として、こちらの姫君のお話をひとつお教え致しましょう。

高いぽっくりを履いた姫君は召し物を両手を使い前で重ね、庭へと出た。柔らかく照らす陽を姫は嬉しそうに見上げた。

「姫様、こちらにおいでで御座いましたか」

「あら、來。どうかして？」

姫は男の声に振り返った。二人の表情は真裏である。一方は楽しそうに微笑み、一方は呆れたように肩を竦めている。

「どうかして、ではありません。室にお戻り下さいませ」

男はため息を吐きながら姫を見た。

「あら、どうして？空はこんなにも晴れているのです。せつかくのお天氣に室に籠もっていてはかびが生えてしまいます」

姫は手を口に当てクスクスと笑った。男は眉をひそめると腰に手をやった。

「姫様がかびが生えるほど室にいらっしゃれば私は安心して執務を果たせるのですがね」

男の言葉に姫はうふふ、と笑う。

「來にはもうかびが生えてるみたい」

そうですね、男は深いため息を吐き出し、首をゆるりと振った。

「さあ、中へお戻り下さい」

男は指をさし、中へと促した。姫はくるりと背を向けると、しゃがみこんだ。足下には今朝方咲いた名も知らぬ花が太陽に向かって顔を伸ばしている。

「あら、ダメよ。約束があるもの」

楽しそうな声色で花に触れる姫に男は眉を上げ、姫へと近づいた。

「また城下の子ども達ですか」

姫はうふふと笑った。男は姫の隣へとしゃがみ込むと、姫と同じ様に力強く咲く花へと目を向け、指をやった。

「一体何時の間にお約束なさったのです」

「さあ？」

姫様、男がギロリと睨みつけると姫はおお、こわい、と肩をすくめた。

「昨日です」

姫の言葉に男は更に眉をつり上げ、花を愛でる指を止めた。

「いつのまに……、」

「そうねえ……、來がお客様のお相手をしてる時だったかしら……？」

ふふ、と笑う姫に男はチツと舌打ちし、己の失態に頭を抱えたい気分だった。

「お一人で城下に降るのはおやめ下さいとあれほど申しましたでしょう。何かあってからでは遅いのですよ」

口が酸っぱくなるほど何度も注意しているのにこの姫ときたら全く聞いていない。今も男の言葉にほんの一時も耳を貸していない。男は姫の花を愛でる手を握んだ。

「姫様、聞いておられますか」

手を握まれ、姫は男の顔を見上げた。

「あら、來こわいかお」

「姫様!!」

男は声を荒らげた。そんな男の様子に姫はまあ、と口に手をやった。

「聞いていますよ。でもこう、右から左へとすーっとですね、」

姫は指で耳を指差した。おどけた様子の姫に男はハア、っと息をついた。

「それは聞いていないと言っのです」

「冗談です」

「ひめさま!!」

男は怒りからなのか嘆きからなのか震える右手を左手で抑え込んだ。

「世を知ることとは大事な私の勤めです。そなたもそう目くじらをたてず、多少のことは目を瞑りなさい」

姫はすくつと立ち上がると空を見上げた。

「世間はこんなにも広いのです。世から見ればこの屋敷などなんてちっぽけなものでしょう。来、あなたも外に目をお向けなさい」

姫は黒曜石のような瞳で男を見た。男はゆるりと首を振った。

「姫様、私は姫様より世間を知っているつもりです。あちこちを旅して回っていたのですから」

「ええ、知っております」

姫は小さな花のように微笑んだ。

「あなたが私のために言って下さっているのは分かっていますよ、来。感謝しております」

姫は豊かな髪をさらりと揺らし、深く礼をした。男はふう、つと息を吐くと困ったように笑った。

「まったく、姫様には適いませんね」

姫はふう、と笑い空を飛ぶ雀を見上げた。

「仕方ありませんね。一刻です。それ以上は譲歩致しませんよ」

男の言葉に姫はぱあっと顔を輝かせた。

「では…、」

己に詰め寄る姫に男は苦笑した。雀はもういない。

「ええ、どうぞ子ども達と存分にお遊びなさいませ」

「まあ…！！來、有り難う！！」

「一刻だけですからね。それを過ぎればもう二度と外へは出しません」

「ええ、分かってるわ」

男は姫に手を差し出し転ばないように誘導した。

「さあ、動きやすいお召し物に着替えましょう。」

男は姫の歩調に合わせゆつくりと歩く。

「そうだわ、來も一緒に行きましょう」

姫は楽しそうに男の手を掴んだ。男は困ったように、また嬉しそうに微笑んだ。

「仰せのままに」

こうして姫君と來様は陽が暮れる頃、泥だらけになって帰ってきたので御座います。お姿は酷い物に御座いましたが、お二人御顔は真つ赤に輝く雄大な夕日にも負けないほど輝いておいででした。姫君は年頃にも関わらず、幼き子どもたちとお遊びなることがたいそう好きだったため來様はこの子供のような姫君から御目を離せないのです。

さて、これで姫君のお話を終了させて頂きます。ほんのお暇つぶしになりましたでしょうか。あなた様のご満足頂けたならばこれ幸いに御座います。

？ ジャパニーズ・ボブ・テイル（後書き）

ジャパニーズボブテイルは日本生れ。とても優しく穏やかな性格。環境の変化に強く、どんな場所でもちゃんと馴染む。遊ぶのも大好きで、子どもともすぐに仲良くなる。

？ シャルトリユー

昔話を致しましょう。そう、あれは今より二百年ほど前のことに御座いましょうか。ある国にひとりの女王様がいらつしやいました。女王様の御髪は少し変わってらしておいででした。黒でいて黒でない。グレーでいてグレーでない。陽にすけるとそう、ブルーに見える、そんな不思議な御髪でいらつしやいました。瞳の色はオレンジ色で、ふつくらとした頬は独特の微笑みをもつやさしい表情をつくりだしておりました。さて、この女王様について少しばかりお話しさせて頂きたく存じますれば、しばしの間貴重なお時間を拝借させて頂きます。

色とりどりの鮮やかな花々が咲き誇るガーデン。真っ赤な薔薇のアーケード。豊かに茂る芝に白い丸テーブルと二脚のこれまた白い椅子。そしてひとりの女性とひとりの男性。ひとりは穏やかに座り、ひとりは優雅に控えている。

「御主人様、紅茶のお代わりは如何で御座いましょう」

男は丸い曲線を描くティーポットを手にすると、主人に紅茶のお代わりを促した。

「ええ、頂きますわ。有難う」

女性はふわりと微笑み空を見上げた。空は高く、青々と色付き、雲は何も知らないかのようにまっさらに白い。のどかな光景だった。

女性は力チャリとカップを置くと、その時間を楽しむかのようにた

だ静かにその時を過ごした。二人の間に会話はない。

「じよ、女王様!!」

ひとりの兵が息を切らしながら薔薇のアーケードをくぐって女性のもとにやって来た。静寂を失った雀はパツと空へと飛び立つ。いきなりの騒々しさに女王と呼ばれた女性は眉を潜めた。しかしあくまで女性は優雅なお茶の時間を崩さない。

「なんですか、騒々しい」

兵は女王の足元までやって来ると倒れ込むように跪いた。

「か、開戦でございます!!隣国が攻め込んで参りました……っ!!間も無く城も包囲されるでしょう……っ!!早くお逃げ下さいませ!!」

女王は兵の言葉に焦ることもなく、優雅に紅茶を口にした。

「ついに来ましたが、この時が」

女王は落ち着いた声色でそう告げるとまたカップを持ち上げた。戦争が始まるというのに女王はただ紅茶を楽しむかのように優雅に座ってカップを傾けている。

「女王様、早くお逃げ下さい!もう時間がありません……っ!!」

少しも動じない女王に兵は汗を流し、逃避を促す。

「ご苦労、下がりなさい」

「で、ですが!!」

逃げるどころか己に下がれと命ずる女王に兵は反した。

「聞えませんでしたか？下がりなさい、と申したのです。これは命令です。下がりなさい」

女王は姿勢を崩さず何もないかのように静かに兵に命ずる。兵は女王の命令に逆らえず渋々その場を離れた。女王は変わらず優雅なティータイムを過ごすかのように椅子に座っている。そばに控える男はまた紅茶を注いだ。

「來、ついに始まったみたいですね」

女王は男に話しかけた。

「そうで御座いますね」

「私、環境の変化っていうものは好きじゃありません。他人が入ってくるのも。あと、マナーが悪いのも好ましくありませんわ」

女王はあくまで澄まし顔で口を開く。そして紅茶の香りを楽しみ、スコーンを手にした。

「相変わらず、來の作るスコーンは美味しいですね」

「お褒め頂き光栄に御座います」

男は手を胸に当て、綺麗な礼をした。

「戦争ですって、來」

「そのように御座いますね」

女王は半分に割ったスコーンにジャムをぬった。赤いジャムは庭で取れたローズのジャムである。

「戦争って私が嫌いなもの全てが揃ってますのね。変化、侵入、無作法。最悪ですわ」

「誠に御座います」

外はサクリと香ばしく、中はふんわり柔らかい。甘酸っぱいジャムは美しい薔薇の花肉入り。女王は満足そうにスコーンを口に入れた。

「でも私、一つだけ変化と侵入を許したことがありますの」

女王はふっくらとした頬を上げ、懐かしそうに微笑んだ。

「それは、來、あなたですよ」

遠くで大砲の撃つ音がする。白い煙が上がり、荒らげた声が聞こえる。

「あなたと出逢った時、私はただの少女でした。どこにでもいる町娘」

男たちは叫び、女子供は泣き喚く。

「あなたは私に來という名を下さいました」

矢は飛び交い、剣は刺さり、大砲が落ちる。

「あなたは私を女王にしました」

町は煙をあげ、人々は逃げ惑う。

「あなたは私をそばにしておいて下さいました」

町は騒がしく、戦いは始まっているというのに、ここはひどく静だった。

城下では人が死ぬ音がしているのに、城の中は恐ろしいほど平和だった。

「あなたは私を女王にとし、あなたは私の中に足を踏み入れた。変化と侵入。赦されざることですわ。でもあなただから許すのです。ふふ、嬉しい誤算ですわね。」

女王は微笑むと紅茶で喉を潤した。そして、そばに控える男に、椅子を勧めた。

「さあ、お座りなさいまし」

女王は男からティーポットを奪うと、もう一脚のカップに優雅に紅茶を注いだ。

「お砂糖はおいくつだったかしら？」

女王はシュガーポットから砂糖を一つ摘み、ポチャンとカップに沈めた。静かに砂糖を溶かし、男にカップを渡す。

城の中に敵国の兵が侵入してきた。城内は騒がしく、女官や、兵たちの叫ぶ声が聞こえる。

「来、私たち最期まで一緒にしら？」

騒がしく階段を登る足音が近づいてきた。荒々しく女王を探す声がある。

「命果てるまで、あなた様のお側に」

ガーデンへと続く扉が開いた。

「そう」

女王は目尻を下げて嬉しそうに笑った。

『女王がいたぞー！！捕らえろーっ！！！！』

女王は最後の一口を飲み干し、ゆっくりと青い空を見上げた。

「ああ、ほんと、いいおてんき」

このお二人がどうなられたのかは分かりません。お捕まりになられたのか、逃げおおせたのか。ただ一つ言えることは、來様はお亡くなりにはなっていないと言うことに御座います。これは今までで一番不思議なお話であったかも知れませんね。

さあ、これにてこのお話は終わりに御座います。このお話の続きは、皆様のお好きなようにお考え下さいませ。皆様のお考えになられた続きが、このお話結末に御座います。どうぞ、皆々様の御自由に。

？ シャルトリュー（後書き）

シャルトリューはフランス生まれ。頬はたっぷり丸々としておりブルの豪華な被毛。とても風格がある。観察力が鋭く、知的で、愛情深い。
環境の変化に弱い。

？ ロシアンブルー

昔々、ではなく今よりほんの少しだけ前に、ひとりの少女がおおきなお屋敷に住んでおりました。少女は大人というには幼く、子供というには落ち着いた、そんなお年頃に御座いました。少女の瞳はまん丸なグリーンで、グレーのようなブルーの御髪はとても艶やかでキラキラ光って見えました。ワンピースの裾から見える手足は何色にも染まっていない真白に御座いました。

大きなお屋敷の大きなお部屋にひとりの少女とひとりの男が向かい合って立っている。大きな窓から眩しい太陽が顔を覗かせている。

「本日は御足労頂き誠に有難く存じ上げます」

「本日は、ご足労頂き、誠に、ありがたく、存じ上げます」

青年の後に続いて少女も繰り返す。

「伯爵様におかれましては、」

「伯爵様に、おかれましては、」

青年が礼をするように、少女もワンピースの裾を指でつまみ上げ、ちよこんとお辞儀する。

「大変御機嫌麗しゅう、」

「たいへん、ご機嫌うるわしゅう……、」

「誠に、」

「まことに……、」

少女は下げていた頭を勢いよくあげ髪をかき混ぜた。

「…………、あゝ、もう！！やめやめ！！」

少女は両手を上げてくるりと後ろを向いた。そんな少女の様子に青年は眉をひそめ、ため息をついた。

「お嬢様」

窘める青年に顔を向けて少女はむうっと口を尖らせた。

「だあってえー」

少女はぷいと顔を背けて、それらしく腕を組んだ。

「…こんな堅苦しいのもうイヤ」

少女はキラキラ光る窓にとととて、と近づくとくるっと回ってワンピースの裾をつまみ上げる。

「あら皆様、ご機嫌よう」

ちよんと小首を傾げてにっこり笑顔。

「ほら、これで良いじゃない」

ぱっと裾を離し、少女は肩をすくめた。青年は相変わらず顔をしか

めたままである。

「今回はお嬢様御生誕のパーティーのために各貴族達がお集まりになるのです。礼儀作法はきちんとして頂かないと困ります」

大きな窓には大きなカーテン。少女はレースのカーテンを体に巻き付けると、青年の方を向いた。

「みんなあたしのお祝いに来るんじゃないわ。あたしと仲良くなるためじゃないの。この家と仲良くするためにやって来るの」

窓を通して入ってくる陽は少女の髪をキラキラと輝かせ、少女の髪はブルーに透ける。

「あたしが不作法で誰が困るの。だあれも困らないわ。だってみんな家しか見てないもの」

少女はまん丸な瞳を閉じた。青年は少女に近づくと、少女に巻きついたレースのカーテンをやりわりとはずす。少女は青年の持つカーテンと青年の間にふわりと閉じこめられた。背にあたる陽が暖かい。

「私が困ります」

青年の言葉に少女はショックを受けたかのように目を見開いた。

「來も、來も、この家しか見てないのね！あたしが名家の名に傷をつけたら困るから、だから！！」

少女は青年から視線を外した。青年は少女を見下ろし、優しくに微笑んだ。そして、まるで恋人に話しかけるかのように柔らかな声色で少女の名を呼んだ。

「君の礼儀がなくなってない、と貴族たちが口にして、君が傷つくのを見たくないんだ」

少女は俯いたままカーテンを握る。レースに皺が寄った。眩しい光が青年の顔を照らす。

「家のことしか考えていない莫迦な貴族たちが君を傷つけるのを僕は見たくないんだよ」

少女は肩を小さく震わせながら青年の胸にしがみついた。

「ごめんなさい、来。ごめんなさい」

青年は少女の背に手を回し苦笑した。

「そんな言葉よりも違う言葉が聞きたいな」

少女は青年に抱きついたまま、真っ赤に染まるはにかんだ顔を上げた。

「ありがと、来」

「どう致しまして」

青年と少女は顔を見合せて笑った。

「さあ、もう一度初めから練習しましょう」
「……………」

青年は部屋の中央へと歩き出した。しかし少女は窓に背を向けたまま動かない。

「お嬢様？」

青年は動く気配のしない少女を不思議に思い、足を止め振り返った。そして少女のぶすつとした顔を見て、ふうつとため息を吐くと、困ったように笑った。

「先に休憩にしましょうか」

青年はしょうがないと言う顔をして笑った。

「……來の作ったクグロフが食べたい。レーズンたっぷりの甘いの」

青年は小さな子を見るかのように優しい瞳で少女を見る。

「はいはい、かしこまりました」

青年はおどけたように礼をした。少女は顔を固くしたまま青年に少し近づく。

「紅茶もいれてね。ミルクたっぷり濃いよー!」

また一歩青年に近づき、ピンと指を上げた。

「「お砂糖は二つ。」」

重なった声に二人はクスクス笑った。部屋を後にする青年のあとを少女は楽しそうに付いていった。ボタンと閉まった扉は太陽の光でキラキラと輝いている。

さてこの後ですが、お嬢様はパーティーでとても素晴らしい御挨拶をなさったそうに御座います。元々お嬢様は大変お賢い方に御座いましたし、礼儀作法など完璧に御座いましたから、このような練習など初めからあつてないようなものに御座いましたけどね。

さあこれにてお嬢様と來様のお話はお終いにしましょう。

？ ロシアンブルー（後書き）

ロシアンブルーはほっそりとスリムで、口は独特の形で、ロシアン
スマイルと称されるように、笑っているような形をしている。
内気で優しく、頭が良い。ちょっと警戒心の強い面もある。

？ マンチカン

今よりほんの数十年前ほど前のお話で御座います。広大な草原を旅して回る遊牧民がいらっしました。彼らはその時々で土地を移住し、山羊や羊、そして犬たちと暮らしておりました。本日はその遊牧民たちのうちの一つの家族に焦点を当ててお話致しましょう。

その御家族にはたいそう可愛がりになられている小さな女の子がいらっしました。その女の子を表す言葉を探すなら、そう、明るく元気で活発、探求心旺盛で陽気、好奇心が強く甘えん坊という感じで御座いましょうか。とにかく元気がよく、いつも跳ねるように走っておいででした。

「らーい！！こっちまでおいでーっ！！」

女の子は齡十五、六くらいの少年に手を振った。少年が走り始めると少女は笑いながら弾むように走った。

「はやく、はやくー！！」

少女はキャッキャッと叫びながら少年の手から逃げようとぴょんぴょんと飛び跳ねる。少年は少女を捕まえようと手を伸ばし足を速めた。

「らーいー！！ほらー、捕まえてみてー！」

少女はくるくると緑広がる草原をスカートを翻しながら走り回る。
クスクスと笑いながら近寄る手を避けた。

「きゃはははは！！！！」

少女がテントの影にかくれ、少年の姿を確認しようと顔を覗かせた
その瞬間、後ろからやってきた少年が少女の服を捕らえた。

「つかまえたっ！」

「きゃー！！！」

少女は嬉しそうに声をあげた。少年は少女の体を抱き上げ、あはは
と笑った。

「じゃあ今度は來が逃げる番ね」

さあ逃げて、と少女は向こうを指差した。しかし少年はトンと腰を
おろすと、そのまま寝ころんでしまった。両手を頭の下に敷き、ゆ
っくりと流れる雲を見上げる。

「ちよつと、きゅーけい」

少年が寝転がってしまい少女は少年を見下ろしながら、えー、と不
満をたらした。少年の体を揺すってみるが、立ち上がる気はないの
か目を閉じて微動だにしない。そんな少年の様子に少女は腰に手を
当て、んもー、と頬を膨らませる。

「仕方ないなあー、ちよつとだけだよー？ちよつと休憩したらもっ
かいするんだからねっ！」

「はいはい」

少年がめんどくさそうに返事をする、少女はつまらなさそうな顔をして少年の隣に座った。少年は真っ青な空に浮かぶ白い雲をただじっと見つめている。

「ねえ、空になんかあるの？」

少年は空を見上げたまま口を開いた。

「雲と太陽」

「面白い？」

「まあ、それなりに」

「ふうん」

それきり二人は黙って空を見上げたまま口を開かなかった。雁の群れが綺麗な逆のVの字を描きながら飛んでゆく。小さな白い雲が大きな白い雲とくっついた。風がふわふわと髪を撫でる。

「ねえ、来ってなんでうちにいるんだっけ？」

不意に少女が口を開いた。

「拾われた」

少年は何でもないかのように答える。

「来ってうちに来る前はどこにいたの？」

少女の問いに少年は暫く考える素振りを見せた。

「……遠く」

「遠く？遠くってどれくらい？隣の隣の村くらい？」

少女は見上げていた首を少年に向けた。少年はちらりと視線を少女にやると、また空を見た。

「……もつと」

少年の答えに少女は手を顎に当てて考える。

「隣の隣の隣の隣くらい？」

少女は首をコテリと傾げた。少女の自分を見つめる視線を無視し、少年はどこか遠くを見るような、そんな目をした。

「……ずーっとずーっと、草原を抜けて村を抜けて国を抜けて、海を越えて、また国を超えるよりも、もつともつとずーっと遠く」

少年は眩しそうに目を細めながらも空を見ることをやめない。

「なんで名前がないの？」

「あるよ。來って名前が」

「それはあたしが付けた名前でしょ。その前までは？」

出会った時、少年には名がなかった。何故ないのかは誰も知らない。少年は話さなかったし、誰も聞かなかった。

「必要なかったしね」

「変なのー」

「うん、そうだね」

少年と少女はぷわぷわと踊る雲を見つめる。風は涼しい空気を運び、少女の髪を持ち上げ、少年の頬を撫でる。さわさわと風の音が耳を掠めた。少女は一度目を閉じると、パツと瞼を上げパンと手を合わせた。

「きゅーけい終わりっ！さ、来始めるよ！！逃げて！」

少女は立ち上がりパンパンとスカートを払うと、少年を見下ろした。

「えー。つかれるからやだー」

気怠そうにする少年に少女は問答無用とばかりに少年の手を引つ張り体を起こさせた。少年な仕方ないなあ、と頭をかくと、やる気なさげにゆっくりと走り出した。

「こらー！やる気だしなさーい！！」

「はいはい」

少年は走りながら左手を上げ、その走りを少しだけ速めた。少女は満足そうに頷くとやる気満々と腕まくりをした。

「さあ行くわよー。覚悟なさーい！！」

こうして少女と来様は陽が暮れるまで追いかけてこを楽しまれたそうに御座います。来様は御歳十五に御座いますが、それまで名がなく、何故こちらにいらっしまったのか、ただの一人も知る者はいら

っ
し
ゃ
い
ま
せ
ん
で
し
た
。 十
五
の
歳
ま
で
名
を
必
要
と
し
な
か
つ
た
來
様
が
一
体
何
者
な
の
か、そ
れ
を
知
る
に
は
ま
だ
早
い
よ
う
に
御
座
い
ま
す
れ
ば、
少
女
と
來
様
の
お
話
を
お
終
い
と
い
た
し
ま
し
よ
う。

？ マンチカン（後書き）

マンチカンは明るく元気で、探究心旺盛。陽気で好奇心も強く、飼い主には甘えん坊。飼い主のことは心から信頼するので、ベタベタくっついてくるのも日常茶飯事。

？ フェリス

今宵はあなた様方が一番お気になさっている方についてお語り致しますでしょうか。

これまでお話にあげました姫様方のお話に必ず出てくる男性についてに御座います。

そう、フェリス様こと、來様に御座います。私の語りましたお話の面妖さをあなた様方は既にお気づきで御座います。

いいえ、決してこれまで申し上げましたお話に出ていらつしやつた來様はそれぞれ別人ではないのです。全てが同一人物、來様お一人に御座います。これを聞いてあなた様方は小首をお傾げになれることでしょう。

無理も御座いません。

なぜなら姫様方がお生きになられた場所、時空列はそれぞれがまるで違うからで御座います。

ある姫様は今より二千年も前に、ある姫君は千年前に、ある女王様は五百年前に、ある王女様は三百年前にお生きになれておいでで御座いました。その他にも、來様のお側にいらつしやつたお嬢様方はみな皆、互いに会ったこともなければ、その後存在さえ知り得ないでしょう。ならば、この姫様方のそばにいたという來様とは一体何者に御座います。

それを今宵、満月輝く夜空の下でお話致しましょう。

どうかお聞き逃しのないよう、お耳をお澄まし下さいませ。

先に申し上げておきますことには、來様は寿命持たぬ者であるということに御座います。來様がこの世に生を受けたのは今より気の遠くなるほど昔のことに御座いますれば、來様自身己がいつ、どの様にして誕生したのか分からないほどで御座いました。

來様はお生まれになった時から『來様』としてのお姿に御座いました。つまりは赤ん坊の姿でお生まれになったわけではないのです。來様は、お生まれになってから今までの間を様々な形で生きて参られました。ある国の王に仕える時もあれば、何百年とお一人で過ごされたり、普通の家族と旅をしたり。來様は様々なお人と触れ合つて参りました。

そして、そんな來様はそのお姿を自由に変えることができたのです。と申しましても、髪の色、肌の色、瞳の色などが変わるわけでは御座いません。來様の容姿は常に同じに御座います。輝く黒髪にハシバミ色の瞳、そして肌はいわゆる黄色人種のようなお色で御座います。では何が変わるのか。お気づきでございましょう、來様は齡を自在に変えられるので御座います。

ある時は十七、八の青年に御座います。

『私はまだ若輩者に御座いますれば、ご指導ご鞭撻の程を頂きたい存じ上げます。』

またある時は二十九、三十の騎士に御座います。

『あなた様のお望みとあらば私は戦場までを単身駆けずり回りましよう。』

またある時は十二、三の遊牧少年に御座います。

『僕はずっと君のそばにいるから。』

またある時は二十七、八の官人のお姿に御座います。

『姫様、遊んでばかりいないで執務を全うなさいませ。』

またある時は二十四、五の執事に御座います。

『私はお嬢様のお父上とお母上に救われたのですよ。』

來様はそばに仕えると決めた方によってそのご容姿、立場によりそのお姿を変えておりましたが基本的には二十四、五のお姿でいられることが多かったようで御座います。またその相手により口調も変えておりました。どのように接することがその相手にとって一番良いのか、來様には不思議と組み込まれておいででした。誰かに仕える時が近づくと、それがすぐにお分かりになり、次の主人に対しての己を造り上げるのです。

そして、來様は産まれた時からお独りに御座いましたので、家族はいらっしゃいません。なので來様には名がないのです。

世を渡り歩く來様を、世間は『フェル』と呼びになりました。

フェルとは『フェリス』のことに御座います。つまりは猫座を意味致します。誰が最初につけたかは存じ上げませんが、何年も何百年も、それ以上時が過ぎても來様は世に『フェル』と呼ばれたので御

座います。このフェリスという名、世に一番最初に生を受け、いつの間にか現れ周りの者を、国を救い、ふらりと消える。気まぐれでいてみなを護る、そんな來様にぴったりの名に御座いました。

ですが不思議なことに、來様が主人と決めた者たちは、みな來様に『來』とお名付けになられたので御座います。來様に名などないので、お好きに呼ぶようにと申しつけると、必ずみながみな、來様を『來』と呼ぶのでありました。姫様でも、少女でも、奥様でも、決まり事かのように『來』とお呼びになるのです。もしかすると『來』という名こそ來様の真名かもしれません。それは來様にも分からないことで御座いました。ただ、來様は來という名をたいそうお気に召しておりましたので、その名を付けられる度、嬉しそうに微笑むので御座いました。

あなた様方はフェリスと呼ばれるお方の噂を一度でもお耳にしたことがあるはずです。その方こそ來様に御座いますれば、今もどこかで來様は旅をお続けになられていることに御座いましょう。

おや、もう夜がだいぶ更けたようです。今宵はもう遅いため、來様についてのお話はここまでに致しましょう。また機会が御座いますれば來様についてのお話をさせて頂きましょう。

さあ、もうおやすみなさいませ。あなた様方に安らかな眠りと良き夢を。

？ フェリス（後書き）

來様の秘密。

？ マヤ

これまで幾つものお話を私はあなた様方に話して参りました。
それをあなた様方は何の疑問も抱かずにお聞き下さいました。

今より千年も昔にお生きになられた姫君、ほんの数十年前にお生き
になられた少女。私の知る來様の旅の先々で出逢った人々の半生を
私は語つて参りました。

さて、私の語るお話をどこか別の場所でお聞きになられたことがあ
る方がこちらにいらつしゃいますでしょうか。

いえ、此処だけにとどまらず、この世界中のどこを捜してもいない
でしょう。フェリス様のご存在を知る者こそいれど、來様とお過ご
しになられた姫様方のご存在こそ知れど、私ほど詳しく知る者はい
ないでしょう。

いつでも物語の片鱗を知ることが可能に御座います。

しかしすべてを知ることは出来ません。口話というものは人から人
へとただ己の記憶のみで伝わるもの。時としてそれは大きく湾曲し
て伝わるものです。必ずどこかで変化し、本来の正しい事実を知る
者はいなくなります。

しかし私の語るものは間違い無く真実、ただ一つでしかないので御
座います。

ではなぜ、何千年も昔のことを私ただ一人が知っているのでしょうか。なぜ來様のお話を私が語ることができたのでしょうか。

お答えいたしましょう。

眞実を申しますれば、私こそが紛れもなく來様が仕えて下さった者だったのに御座います。

そう、私こそが女王であり王女であり姫であり少女だったので御座います。

嘘だと思いで御座いましょうか。しかしこれこそがたった一つの眞実に御座います。

私は何度も生き、そして何度も死にました。あらゆる場所で生を受け、あらゆる時代にて名を頂戴致しました。時に女王として人を魅了し、時に王女として地を支配し、時に姫として国を想い、時にただの少女として野を駆け回りました。私が生を受けると、來様は必ず私のもとに来て下さいました。時に私がひどく冷酷であっても、時に私がひどく臆病者であっても來様は変わらず私を愛して下さいました。

私が私であることを知るのはその命が終わるときで御座いました。命の灯火が消えるとき、私は自分が女王だったことや、姫であったことを思い出すのです。そして二十四、五の姿のまま何十年も見目形の変わらない來様を見て、そのお方が來であることを理解するのです。

なぜ自分が來様に『來』という名を与えたのかを思い出すのです。

私は本当の始まりの時、つまり初めての出逢いの時に、來様に來という名を与えたのに御座います。來様はその名をたいそうお喜びなさって下さいました。そして、初めての別れの時私達は一つの約束をしました。

『もしまた出逢ったとき、私はあなたにまた來という名を与えましよう』

私達が再会するとき、私はいつも來様を覚えてはいませんでした。しかし私の魂は來様を覚えていたのです。だから私は何度生まれ変わっても來様に來という名を与えたのです。そして、死を覚悟した時、私は女王でも王女でも姫でもなく、初めて來様に來という名を与えたひとりの女に返るので御座いました。

『ああ、來。また私の側にいてくれたのね。ありがとう。ありがとう。來』

『次また君が生まれ変わっても、僕は君を見つけて見せるさ。僕の一番大切な君を』

『ああ、來。らい、愛していたわ』

『私もあなた様をこの世で一番お慕い申し上げております』

私はいつも來様の温かい腕の中で眠りにつきました。何も覚えていない私を來様は決して咎めは致しませんでした。それが私には辛く、

苦しかった。

私がこの世にいないときは來様は一人で世を見て参られました。そして、私が來様を必要とした時、來様は私の前にそのお姿を現しになられたので御座います。私にとって來様は私自身なので御座います。來様がいらっしゃるからこそ、私は何度もこの世に生まれ変わるのです。

私は、己が私だと認識するのは命が消えるときと先ほど申しました。ではなぜ私は今、己が來様の仕える『私』だと認識しているので御座いましょう。

いえいえ、私はまだ死ぬときでは御座いません。今度の私は私が私であるということを生まれた時から知っておりました。産まれた時から私は女王で王女で姫でただの少女だったので御座います。今までの私には何らかの役割が御座いました。きっと、皆様に今までの私たちの物語を語ることが今生きる私の役目なので御座いましょう。

え、來様に御座いますか？

ええ、勿論今も私のそばにいて下さっています。私がこうしてあなた様方にお話をする間、今この瞬間さえも隣にいて下さっているこの男性こそが來様、本人に御座います。

今度の私の役目を終え、命の終わりを迎え、また産まれた時、私は己が女王だったことも姫だったことも、『私』であることも覚えてはいないでしょう。しかし來様は必ず私のそばにいて下さっていると信じております。そして、また『私』として皆様方にこうしてお

話しする役目を与えられた時は、私は私として生まれてくるでしよう。

さあ、このお話をあなた様方が信ずるも信じないも各人の御自由に御座いますれば、私の物語の終焉を迎えさせて頂きたく存じ上げます。皆様方、また逢うときが御座いますその時には、何卒お耳をお貸し下さいませ。その時にはまた新たな物語が加わっていることに御座いましょう。

これにて死なき者フェリス様と死ありき者マヤこと私の物語とさせて頂きます。

？ マヤ（後書き）

『私』の秘密。

マヤⅡ 琉球語で猫。

？ 仕えし者、仕えられし者

さあ、皆様方お集まり下さいませ。物語の誕生と終焉についてお話致しましょう。

私は皆様にこれまで死なき者來様と死有りき者のお話をして参りましたね。では今日は來様が初めてお仕えした時のことをお話致します。

來様はこの世に生まれし時、お独りに御座いました。気が狂いそうなほど長い年月をただお独りで過ごしになられたので御座います。しかし來様は寂しいとは思いませんでした。なぜならそれが來様にとって当たり前のことであつたからに御座います。

そんな來様を人々はフェリスと呼びました。

誰が言い出したのか、それは分かりません。皆がフェリスと呼びましたが、來様はそれが己の名だとは思いませんでした。それは己の眞の名だとは思ひにはならなかつたのです。しかしそれを否めることもなかつたので御座います。

そんな來様が初めて出逢つた方はこれまでお話してきた方々とはまるで違っていました。王女でも姫でもなくただの少女に御座いました。本当にただの少女、に御座います。特別美しいお顔も、特別妖艶なお身体もお持ちではなかつたのです。おっとりとした、少しふ

くよかなお体の、どこにでもいるような、そんなお方で御座いました。しかし誰よりも気高く、好奇心に満ち溢れた輝く銅色の瞳をお持ちに御座いました。そんな彼女を來様は誰よりも魅力的であるとお考えになりました。

「あなた、フェリスさんね。あたしあなたのことを聞いたことがあるわ」

少女は輝く瞳で少年を見た。

「僕は、僕はフェリスかもしれない。だけどそうでないかもしれない」

少年は表情のない顔で彼女の瞳を見た。

彼女の瞳は真昼の太陽のように明るく、また夜空に輝く星のようにキラキラと輝いていた。少年はこのように美しいものを見たことがないと思った。その瞬間、少年は目の前の少女に心を奪われた。

「フェリスはあなたの名でしょう？」

「フェリスは僕の名じゃない。僕に名はない」

少女は首を傾げた。その間も少年は彼女の瞳から目を離さなかった。

「名前、ないの。なら、あたしが付けてあげる」

少女は素晴らしい思いつきだと言わんばかりに目を輝かせ、手を打った。

「きみが……？」

少年は相変わらず変化のない表情で少女を見つめる。

「そうねえ……、らい……、そう来っというのはどうかしら!？」

少女は少年の瞳を覗き込み、返答を待った。

「らい……、らい」

「そう、来!!」

少年は何度かその名を口にした。そしてしばらくしてゆつくりと口端を上げた。それは少年がこの世に生を受けてから初めての笑顔であつた。

そして少年は来としてこの少女と時を過ごしたので御座います。少年は少女と過ごす間いくつもの『初めて』を経験なさいました。

初めての笑顔、

初めての怒り、

初めての喧嘩、

初めての仲直り、

初めての喜び。

その一つ一つ全てが来様を幸せにとさせました。なにかもが順調で何も問題がないかのように思われました。

しかしある日來様はそれがつかの間の幸せだったと悟ったので御座います。

そう、

少女には死が待ち受けていたので御座います。少女の命は永遠ではなかったのです。この時來様は初めての悲しみを経験なされたので御座います。

ベッドに寝込む少女のそばに青年が静かに座っていた。

「來、來はちつとも歳をとらないのね」

かつての少女は弱々しく微笑んだ。

「気持ち悪いかい？」

「いいえ、ちつとも」

少女は力強く答えた。

「君は知っているだろう？僕は死を持たない。だけど、君が望むなら、僕は、君と同じ様に年老いた姿になれるよ…。」

君が望むなら、今すぐにでも、」

年老いた少女の瞳は初めて出逢った頃のようにキラキラと輝いていた。

「いいえ、いいえ來。あなたはそのままです。私あなたのその姿が一番好きだわ。私が一番輝いていた二十四の時の姿。二十四歳のあなたが一番素敵よ。もちろん他の姿も私は好きだけれど」

かつての少女は悪戯っぽく笑った。

「ねえ、來。悲しまないで」

彼女は青年の下がった眉尻を見てふふふ、と笑った。

「來が悲しいと私も悲しいわ」

「でも、でも君は、」

彼女は静かに天井を見上げた。彼女の目は相変わらず夜空の星のように輝き、太陽のように明るい。

「來、あたしちつとも怖くないの。死ぬことが怖いと思わないのよ」

青年はその瞳から涙を流した。

青年が初めて経験した涙だった。

「なぜ、なぜ僕は死なないのだろう。なぜ僕は君と共に逝けないのだろう」

青年は流れる涙を抑えることができなかった。少女は己も涙を流しながら静かに微笑んだ。そして横たわる己の体をゆっくりとお越し、青年の頬へと細くなつた手を伸ばした。

「來、ほんの少しのお別れよ。ほんの少しだけ。そしたらまた逢えるわ。來と別れるのは悲しいけれど、私たちはまた何度でも出逢えるわ。ねえ、そうでしょう?」

青年は彼女の、悲しみに揺れながらも力強く輝く瞳を見つめた。彼の瞳から流れる涙は終わりを知らない。

「君がいなくなったら僕は來でなくなってしまう。また名なき者と戻ってしまう」

彼女は青年の頭を抱え込み、そのやせ細った体で抱き締めた。

「私が何度でもあなたに來、と付けてあげる。私が生まれ変わってあなたと出逢った時、私はあなたを來、と呼んであげる」

青年は力の入らない腕をそつと彼女の背中に回し、彼女のやせ細った体躯に更に悲しみを深くした。そして、彼女の体を力強く抱き締めた。

「らい、來。私の大切な來」

「僕を、ぼくを置いて、いか、ないで…っ」

「來、來ちゃん。あたしの大好きな來。ほんの少しの辛抱よ。涙を止めて、笑って…? あたし來の笑顔が一番好きよ」

青年は涙を流しながら必死で口をあげた。眉尻は下がり、情けない目をし、うまく笑えていなかった。けれど彼女はそんな彼を見て幸せそうに微笑んだ。

「有難う。ありがと、來。愛していたわ」

そして、彼女は一人、静かに心の臓の音を止めた。

青年は泣いた。

どのように涙を止めるのか分からなかった。

初めての涙を止める方法を教えてくれる彼女はもういない。

そして涙が止まった時、彼は初めてをお願いをした。

初めての望みを星に願った。

次に彼女がこの世に生を受けし時、どうか彼女に美しき容姿を、どうか彼女に色香溢れる躰を、どうか彼女に溢れんばかりの知能と才能をお与え下さい。

それが彼女を幸せにするならば、この世の美しいものの全てを彼女にお与え下さい。

世は彼の望みを叶えた。

彼女は生まれ変わる時、誰よりも美しく生まれた。

彼は喜んだ。星に感謝した。

しかし彼女は彼を覚えてはいなかった。

天は彼女に美しさと引き換えに彼の記憶を奪った。

彼はまた悲しみに打ちひしがれた。己の愚かな行為を恨んだ。浅はかな願いを怨んだ。

だが、彼女と再会した時、彼女は彼を覚えてはいなかったが、彼女は確かに彼を『來』と呼んだのだ。彼女は彼を覚えてはいなかったが、彼との約束は覚えていた。彼にはそれだけで十分だった。彼女が決して己を覚えていなくても彼女は己をまた來と呼んでくれたのだ。何度生まれ変わっても彼女は彼を來と呼んだ。

『そなたは今日から來だ』

『あなたに來という名を与えましょう』

『お前は來じゃ』

『らい、來にしよう！』

こうして來様は來として彼女に仕え続けたので御座います。彼女たちが最期の時を迎えるときまで見守り続けたので御座います。彼女たちは己が死を迎えるとき、己が初めて來様に名を与えた者だということを思い出したのでした。そして、初めて彼と出逢った時の少女にと戻り、彼に御礼を申し上げるのです。

『來、また私を見つけてくれたのね。また私のそばにいてくれたのね。有難う』

來様はその御言葉をお聞きし、また新たに生まれ変わる彼女のそばにすることを誓うのでした。そして、あの日、かつて初めて望んだ

愚かな願いは二度としない、そう誓いながら彼女の死を静かにお見守りになられてゆくの御座います。來様は彼女を奪う死を怖いとは思いませんでした。なぜなら彼女は何度もまた生まれ変わり、彼を來と呼んでくれるからです。彼女との別れは何度経験しても悲しいもので御座いましたが、彼は彼女がまた己の前に姿を現して下さることを信じていたのに御座います。

そう、そしてそれは今も。

さて、これにて物語の誕生と終焉のお話を終わらせて頂きます。どうか來様を可哀想なお方とお思いにならないで下さいませ。確かに彼女は來様を覚えてはいらっしやいませんが來様は確かに己が幸せだと思ひになられているので御座いますから。

さあ、このお話はこれまでに致しましょう。ご静聴のほど誠に有り難く存じ上げます。

？ 仕えし者、仕えられし者（後書き）

誕生と終焉は儚くも美しい。

零 死を見送る者、死する者

ねえ、ねえマヤ。僕を覚えてる？

ずっと君のそばにいたんだよ。

君と出逢ってから何年も僕は君のそばにいたんだよ？

君はどんな年をとって、僕は変わらなくて、でも君はずっと僕といてくれた。

君が死んだとき僕は天に願ったんだ。君が生まれ変わったときそれが君を幸せにするならば、君に最高の美貌と最高の知恵と最高の富と最高の権力をお与えくださいって。

君が生まれ変わったとき天は僕の願いを叶えてくれたよ。だけど、天は一番大切なことは叶えてはくれなかった。君は生まれ変わったとき僕を覚えていなかった。とても悲しくて哀しくてかなしくて。どうして君は僕を知らないの？僕だよ？来だよ？君がつけてくれた名前なのに、なのにどうして君は僕を覚えていないの？

ねえ、僕はもうこんな馬鹿な願いはしないと誓うよ。

僕は君が幸せならそれでいいって思ってたんだ。でも、でも君が僕を覚えていないのは耐えられないんだ。

ねえ、僕は永遠の命なんていららないんだよ。

君と一緒に生きられない命なんていららないんだ。

君は何度も生まれ変わって僕をそばに置いてくれるけれど、僕は本当は寂しくて寂しくてたまらないんだ。

ねえ、僕は君と生きたいんだ。

一緒に歳をとって、一緒に死にたいんだよ。

そばにいれるだけで十分だったはずなのに、僕はそれだけではもう耐えられないんだ。

お願い、僕は、僕は今度は君の恋人になりたいんだ。

君を愛しているんだよ。君がいないと僕は生きられないんだ。

ねえ、早く産まれてきて？

僕は必ず君を見つけるよ。

だから君は、僕を見つけてほしい。

そしてお願いだから、僕を忘れないで。

僕を独りにしないで。

マヤ、僕には君しかいないんだ。

零 死する者、死を見送る者

ねえ、ねえ來。

あたしあなたがいてくれて良かった。あなたがいたからあたしいつも楽しくて、幸せで、辛いことも悲しいことも、あなたがいたからあたし笑顔でいられた。

あなたは歳をとらないことを嘆いていたけれど、あたしはそうは思わない。あなたはたくさんの人の生と死、善と悪を目にしてきたでしょう。それは辛いことかもしれない。たったひとり世に取り残されたような、そんな気持ちがあるかもしれない。

だけど、あたしはあなたが羨ましい。

あたしが生まれる時には、前に生きていた時よりも文化も技術も進んでいて、あたしはいつも様変わりした世に生まれるの。けどあなたは世の移り変わりをいつも自分の目で見られるのよ？それってとっても素晴らしいことだわ。でもあたしが永遠の命が欲しいと思うのはそれだけではないの。

あたし、あなたと一緒に生きていきたいの。あたしはあなたと出逢う度に別れを経験する。もうあんな思いをしたくないの。あなたにあんな思いをさせたくないの。

あたし、絶世の美貌とか、博識な頭とか、妖艶な肉体とか、かわいらしい歌声とかいらない。あなたといれたさえそれでいいの。でもそれが一番欲深い願いかもしれないね。

ねえ、來。

あたしあなたを愛しているわ。

あなたがいれば他になにもいらない。あなたがあたしのそばにいてくれるなら、今あるもの全てを捨ててもいいの。あたしたち、いつもどんなときも一緒よ。

あたしね、あたしたちを恋人とか家族とかそんな言葉で表すのは間違いだと思うの。

だって確かにあたしは來を愛しているし、來もあたしを愛してくれているけれど、恋人とか家族とかなんて言葉じゃあたしたちを表すことはできないんだもの。あたしたちは二人で一つ。どちらが欠けてもだめ。あたしは來がいないとだめだし、來もあたしがいないとだめでしょ？何度離れてもその度にあなたはあたしを見つけてくれる。

ねえ、來。

今度はあたしがあなたを見つけてあげる。

だから來、待ってて？

そしてお願いだから、笑顔であたしを迎えて。
あたしはあなたを必ず捜し出してみせるから。

來、あたし、あなたがいないとだめなの。

零 死する者、死を見送る者（後書き）

二人を別つ死は時に優しく、時に残酷。

おわり

むかしむかし、おんなのことおとこのこがいました。

ふたりはいつもいっしょでした。

おんなのこは、おとこのこのことがだいすきで、おとこのこは、おんなのこのことを、もつとだいすきでした。ふたりがこいびとどうしになることはなかったけれど、おとこのこも、おんなのこも、とってもしあわせでした。

そんなふたりをひとびとは、いつもやさしくみまもっていました。

おとこのこはフェリスとなづけられました。

フェリスとはねこ座をいみしめて、よのなかのひとは、おとこのこをフェルとよびます。

でもおんなのこはフェルとはよびませんでした。

おんなのこは、おとこのこを來と呼びます。

おんなのこのなまえはマヤといいました。

ふたりはいつもいっしょで、たとえばはなれるときがきても、かならず、おとこのこが、おんなのこをさがしました。

ふたりはいつまでもいっしょなのです。

たとえ、死がふたりを別つとも、ふたりをえいえんに、はなればなれにすることはできないのです。

それはむかしむかし、からはじまるものがたり。
ねこのしゅごしん、來さまと、ねこのじょおうさま、マヤさまのお
はなしなのです。

おわり（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5979p/>

猫の女王様

2011年1月30日16時46分発行